

仮名の書の美

——『源氏物語』における筆跡描写に即して——

加瀬佳樹

序

「書は人なり」という言葉が今なお息づくように、書の理想は伝統的に人格との連関において追及される。しかしながら、これを美学的な方面から論じる研究は数えるほどしかない。本論文は『源氏物語』における仮名の書(以下、「仮名」とする)の筆跡描写に即して、筆跡美と人格美の関係の中で仮名の美を明らかにする試みである。その手続きとして(1)紫式部が理想とした仮名を「今めかしき」技巧から「まこと」の人格に求めるべく先行研究批判を行う。(2)「帚木」にある人書一体の記述をめぐって筆跡の存在論的分析を行う。(3)「女性の筆跡」と「梅枝」の是非について〔価値判断〕と〔価値創出〕の観点から論じる。(4)かかる結果として導かれる「光源氏の筆跡」の美的イメージに善美一如なる仮名の美を具体的に検証する。しかし本稿は、紙幅の都合上(1)と(2)を論じるにとどめる。

1. 先行研究批判 —— 「今めかしき」技巧から「まこと」の人格へ

先行研究(杉浦2007)は11世紀初頭の仮名遺品⁽¹⁾と『源氏物語』における筆跡描写の比較を通して、紫式部が理想とする仮名を分析する。杉浦はその理想を「今めかしき」仮名へと結論づける。まずは、杉浦自身の考えを整理している以下の主張を確認しよう。

「今めかし」というのが『源氏物語』の根底に流れるコンセプトのひとつである。「今風である」というのが大切であるとするなら、末摘花のようにしっかりと学んではいるものの古臭く冴えないような書は、紫式部の感性からは外れており、式部

はそれを源氏やそれを取り巻く人達の言葉を借りて表現している。王朝文化の栄えた時代において、流行に敏感でない事は、決定的な弱点であった⁽²⁾。

杉浦の主張は次の二点に纏められる。(I) 末摘花の仮名が紫式部の筆跡観を明かす手掛かりになる。(II) 「今めかし」の観念は、物語観や筆跡観を貫く紫式部の実存的基底である。以下では、上述の主張を支える論拠を辿った上で反論を示していこう。

まずは(I)である。国風の気運は平安美術を一例に多くの文化を生み出したが、この中でも、紫式部がことに目を瞞るものが仮名であった。

よろづのこと、昔には劣りぎまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。古き跡は定まれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなんありける⁽³⁾。

(『源氏物語』③、「梅枝」、415頁)

そして、発展著しい今の世の仮名とは対照的に、紫式部は末摘花の筆跡をこう表現する。

手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまへり。

(『源氏物語』①、「末摘花」、287頁)

御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫深う、強う、固う書きたまへり。

(『源氏物語』③、「行幸」、315頁)

その人柄もさることながら、彼女の筆跡は源氏の消極的反応や笑いを生む。これらの記述を裏返せば、たおやかな造形や暢達した連綿、散らし書き⁽⁴⁾は一世を風靡する時代的趣味であったと考えられる。この分析の限りでは、杉浦の考え⁽⁵⁾にも頷けよう。「古」の字姿と対比させ「今」の流行を強調する背景に「今めかしき」仮名へ

の好感があったには違いない。

だがここに一つの反論が予想できる。「今めかしき」筆跡への否定的表現を「今めかしき」筆跡に対する肯定的態度と見做すのは正しいか。否、これは早計である。源氏は「尽きせぬものかな。このごろの人は、ただかたそばを気色ばむにこそありけれ」(『源氏物語』③、「梅枝」、421頁)と「古」の嵯峨・醍醐天皇の筆跡を称賛する一方で「今」の人々の筆跡に苦言を呈する。この記述は紫式部が「今めかしき」仮名への悪感を併せ持っていた事実を証明する。

つぎに(Ⅱ)である。杉浦の場合、この第一の見落としは、第二のそれへと直結する。つまり、第一の盲点から生じる連想により作家の人柄を見誤ることである。紫式部を「流行の追随者」と見做さんばかり認識⁽⁶⁾とは裏腹に、紫式部の性格は「今めく / 今めかしき」事物と相容れない関係にある。藤原実資への評言はこの事情を逆説的に伝える。

いみじくざれいまめく人よりも、けにいと恥づかしげにこそおはすべかめりしか⁽⁷⁾。

(『紫式部日記』、164頁)

実直な男性への好意に加えて『紫式部日記』には、「今めかしき」宮廷生活に馴染めずして煩悶する魂の歎泣ともいべき告白が五節の舞姫のシーンを一例として散見する。「今めかし」の感覚性に対する憂愁は、精神的価値を志向する意識の表れとして読めよう。形式にではなく内容に重点を置く態度は仮名にも妥当する筈である。

これらの論点を紐づけたとき、杉浦がいう「今めかしき」仮名の実際とは、「今めかしき様式」の意味へと換言できる。紫式部が理想とした仮名をここに把握したとき、彼女にとって日々の現実的世界は理想郷^{ユートピア}であったというほかないだろう。

いまめかしき手本習はば、いとよう書いたまひてむと見たまふ。

(『源氏物語』①、「若紫」、295頁)

「今めかしき手本」を習う過程で、当時の人々は「今めかしき様式」の表現を後天

的に獲得する。つまりこれは、習得されるべき「今めかしき技巧」により機械的に繰り返される仮名の字姿として読めよう。以上の見地から、蛸兵部卿宮の次の言葉は注目に値する。

何の才も、心より放ちて習ふべきわざならねど、道々に物の師あり、まねびどころあらむは、事の深さ浅さは知らねど、おのづからうつさむに跡ありぬべし。筆とる道と碁打つこととぞ、あやしう魂のほど見ゆるを、深き労なくみゆるおれ者も、さるべきにて描き打つたぐひも出で来れど、家の子の中には、なほ人に抜けぬる人の、何ごとをも好み得けるとぞ見えたる。

(『源氏物語』②、「絵合」、389-90頁)

書の美的価値を左右する力点を二つながら認めて、「才」〔=技巧〕に対する「魂」〔=人格〕の優位を紫式部は言明する⁽⁸⁾。当代一流の風流人蛸宮にこの箴言を託した紫式部は「書は人格なり」に根差した筆跡観を有していた、といえよう。

2. 筆跡の存在論 ——ものからことへ、ことからものへ

「帚木」巻の生々しい女性論はこれを一人の女作家が書き得た男性談義として有名である。所謂この「雨夜の品定め」には、女性の在り方を芸術の比喻で説く一場面がある。しかし、『孟津抄』(1575)の註するとおり、この類比は人間存在一般に妥当する⁽⁹⁾。かかる事情の中で、引き合いに出される仮名の喩えには、筆跡と人格との同一性を探って実りがあるろう。指物、大和絵の例に続けて、それは次のように語られる。

手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしこの、点長に走り書き、そこはかとなく気色ばめるは、^Aうち見るにかどかどしく気色だちたれど、なほま^Bことの筋をこまやかに書き得たるは、^Bうはべの筆消えて見ゆれど、いま一たびとり並べて見れば、なほ実になむよりける。

(『源氏物語』①、「帚木」、70頁)

まず、この一文はざっくり A と B の纏まりとして二分割される。これを詳細に見ると、傍線部 A と B は異なる二つの筆跡の特徴ないしは特性を表す一方で、点線部 A と B はこの各筆跡に応じた印象ないしは実感を鑑賞的視点において示している。言うまでもなく、A に比して B の筆跡を紫式部は高く評価する。

では、このわけは一体何であるか。それは、筆跡に内在する「あること」の有無に起因しているように思われる。すなわち、「深きこと」がない A の筆跡に対して、「まこと」があるのが B の筆跡である。しからば、この美的判断の力動性を担う「まこと」とは抑々何であるか。それは真理である。傍線部 B の記述にあつて「まことを書き得たる」と書き得なかったように、真理としての「まこと」はあくまで「筋」において表明せられるものである。したがって、ここでの「筋」は直接的に「まこと」を反映した現象的存在としてこれを、仮名の書の美の象徴そのもの、と捉えることができる。では、この「筋」とは何であるか。

書の東洋的深淵といふ祕境の醍醐味は、外國的抽象美には求められない。わたくしはまだ、一行の平安朝假名書きの美に匹敵する外國人の抽象的線美をみたことがない⁽¹⁰⁾。

高村光太郎のこの言明をはじめ、仮名の美的本質を「線」と観る慧眼の士は少ない。筆者はこの「筋」を「線」と解釈して議論を進めることにする。では、抑々「線」とは何か。こう問えば、これをまずは「運動の痕跡」とか「記録された運動」と表現できる。次に、この「運動」とは「書く」という有意的動作において成立するため、種々の運動と区別してこれを「行為」と捉えることができる⁽¹¹⁾。さらに、この「書く」という行為は、これを達成するために「手段的行為」を要求する。すなわち、「筆」という(道具的)手段を選択して、これを「つかふ」という行為である。とすれば「筆づかひ」という動詞の名詞法を次のように用いる紫式部は、これまでの分析と同一の認識をつとに有していた、と考えられる。

言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしくいたり深う見えたり。

(『源氏物語』②、「須磨」、193頁)

なげの走り書いたまへる御筆づかひ言の葉も、をかきさまになまめきたるけはひ

(『源氏物語』⑤、「椎本」、196頁)

書も紙面に固定される限りあくまで静的な表現の一つである。紫式部はこれを「筆づかひ」という大和言葉で動的に捉え返す。彼女の眼に映った筆跡は、ものでありながらことであり、ことでありながらもものであった。完了した「筆跡」であると同時に存続する「行為」である、という存在の二重性は、傍線部のごとき美質を共通して有することで、「美しき筆跡」と「美しき行為」とが表裏一体となる仮名の筆線美を特徴づけている、と言えよう⁽¹²⁾。しかしもう一方で、さきの引用には閑却できない更なる事実が示される。つまり紫式部は、かかる存在構造の美的統一を「言の葉」を含めて図っている、という事実である。これをどう把握すべきか。

日本の伝統的な考え方の一つに「言霊」という概念がある。「言葉」が「事」を顕わにするとして、神秘的な力が「言」に宿ることを自覚するこの思想は、「言葉」即「事」と捉える「言事融即観」に基づく。古代社会ではこの「言」にあたる意味と「事」にあたる意味とを「こと」の一語で兼有していた。『岩波古語辞典』(1990)の「こと」の項目によると、「こと(言)」と「こと(事)」とを同一視する「こと」の素朴な言語使用は、奈良・平安時代でも部分的に保存されている。事実、紫式部の文体に以上の意識が息づくことは以下の和歌からも窺える。

散る花を 嘆きし人は 木のもとの さびしきことや かねて知りけむ

(『紫式部集』43)

言霊のこの論理は、仮名の美を深遠的たらしめるものとして重要な意味を帯びてくる、と思われる。これを解決する鍵は「言葉を書く」という書の芸術性が握る⁽¹³⁾。「こと(言・事)」の二重性において、紫式部は「仮名の芸術性」と「言霊の神秘性」との

間に美学的な結びつきを認識している、と考えられる。

ここで、さきに分析した「帚木」の記述を思い起こそう。傍線部 A は「深きこと」がない筆跡であり、傍線部 B は「まこと」がある筆跡であった。これは、前者には「深きこと（言）」かつ「深きこと（事）」がなく、後者には「まこと（言）」かつ「まこと（事）」がある、という風に解釈される。「こと（言）」とは言葉よりは「言の葉」の意として、「こと（事）」は「行為」の意として読むべきであろう。とはいいながら、これは二つの「こと（言・事）」が水平的に並立することを意味しない。「こと」を現象的事物として見た場合、かかる解釈には一つの違和感が生じよう。「線」に「こと（言）」の有無を問えるか。つまり「線は言の葉である。」という命題は成立するか。これは可能である。紫式部は次のような一場面を描写することで、かかる哲学的問題にすでに答えている、といえよう。

古き言どもなど思ひすましたまひて、御心のゆくかぎり、草のもただのも、女手も、いみじう書きつくしたまふ。

（『源氏物語』③、「梅枝」、418頁）

この「梅枝」の場面では、自由自在に仮名を書き分ける源氏の姿が示される。その動的な姿は「草のもただのも、女手も」という一気呵成な文体のリズムに伴い、自動筆記ともいうべき創造を象徴する。かかる書作の秘密がさきの問いに応答する。ここには、「こと（言）」どもへの直観〔=共感〕から生じる情動が「こと（言）」どもに相応しい「こと（事）」どもに依じて「もの」〔=筆跡〕どもへと表現されてゆく姿が示される。これはつまり「言の葉」の内容が変われば「筆づかひ」も変わり「筆跡」も変わることを意味する。したがって、さきの命題「線は言の葉である。」が成立する根拠は、「線はこと（言）によって規定されること（事）である。」ないしは「こと（事）を規定すること（言）である。」という論理による。すなわち、「線」には「こと（言）」によって規定される「こと（事）」があり、「こと（事）」を規定する「こと（言）」がある、ということになる。これは、現象的には〈一〉でありながらも存在的には〈二〉たる「書くこと」の姿である。だとすれば「筆づかひにつけたる言の葉」（『源氏物語』①、「夕

顔」、146頁)と表現する紫式部がこの美学的構造を認めていたことは明らかであろう。「こと(言)」は「こと(事)」に付託され「美しきこと(言)」はまた「美しきこと(事)」に付託されこれを規定する。「美しきこと(言)」によって「美しきこと(事)」が規定された結果「美しきもの」として表現される。つまるところ、さきの「言の葉」を含めた存在構造の美的統一のわけには、紫式部のかかる哲学的認識を以って応答できよう。

では、この見地からもう一度「帚木」の記述に戻ろう。傍線部Aは「深きこと(言)」によって規定された「深きこと(事)」がないことを示す。かかる理由から「深きもの」たる筆跡として表現されないため「点長に走り書き」するという現象に陥る。それは「うはべの筆消えて見ゆ」傍線部Bとは対称的に「うはべの情けに手走り書き」(『源氏物語』①、「帚木」、56頁)する筆跡とも相通じる。『三宝感応要録紙背仮名消息』にはこの印象を断片的に確認できる。

これに対して、傍線部Bは「まこと(言)」によって規定された「まこと(事)」があることになる。筆跡美と人格美が相即する仮名の実相がここに胚胎しているならば、一体これは如何なる状態を表すか。「こと(言)」によって「こと(事)」を規定する。当然。この言い回しは「こと(事)」において「こと(言)」を実現するという意に等しい。さらにこれは二つの仕方を包含する。第一の仕方は「こと(事)」において「こと(言)」を「なす(成す)」であり、第二の仕方は「こと(事)」において「こと(言)」が「なる(成る)」である。「言+成」の会意文字「誠」は、『漢字語源辞典』(1965)によれば、首尾一貫した言行、『字統』(2004)によれば、誓約を成就する意、と説明される。『中庸』に「誠とは自ら成すなり」とあるように「誠」の本義は確かに前者にあらう。「言の葉」に対する「筆づかひ」の肉迫、「筆づかひ」における「言の葉」の投影が、噛み砕いてこれを言えば、「言うこと」と「すること」の一致が、書字現場の渦中において、道徳的価値(善)の生じ得る機構であることは間違いない。ただ、紫式部は人間的意志にのみ還元できない道徳的生命を「まこと(誠)」に見出した、と思われる⁽¹⁴⁾。

そこで、後者の仕方「こと(事)」において「こと(言)」が「なる(成る)」が重要となる。先述した源氏の書作現場に再び目を移そう。「ゆく」「すむ」「なる」の意味的同一性を説く荒木博之の研究⁽¹⁵⁾に鑑みると、この描写は「なる(成る)」の象徴的イメー

ジとして把握できる。〈一〉なる直観から〈多〉なる個別的書体へと淀みなく離散するイメージそのままに、「言成る」ことが「事成る」結果としての書字跡が「異なる」状態で存立する。どれ一つとして同じでない生命を産出する源氏の充溢した姿は、まさに「飽く世なくめでたし」（『源氏物語』③、「梅枝」、418頁）という言辞に相応しく格別なのであろう。さて、自然的推移を特徴とするこの仕方が想定するのは、「言の葉」を「筆づかひ」を「筆跡」を統一的に性格付ける自己同一性の原理「人格」としての「もの」である⁽¹⁶⁾。種子無きところに実は成らない。「成ること（言・事）」は生命の連続という点で、「まこと（誠）」が「まこと（言・事）」として自己展開するための一契機となる。「ま」は美称である。真玉や真木柱などの用例にも明らかなように「ま（真）」は、完全な、純粹の、本当の、といった意味を持つ。したがって、「まこと（言）」によって「まこと（事）」を規定する、という当初の状態はこの点よりして、一方では「真事」において「真言」が「成る」という状態と等価であり、他方ではさきの道徳的価値（善）に加えてここに真理的価値（真）を備えた状態である、といえよう。ここで『源氏物語』に精通した本居宣長が『古事記伝』で述べた一節を思い出したい。

抑意と事と言とは、みな相稱へる物にして [...] その意も事も言も相稱て、實なり⁽¹⁷⁾

このような運動傾向を「實（実）」と見做せるなら、紫式部が「実になむよりける」⁽¹⁸⁾とBの筆跡を評価したのも当然であっただろうか。一面の真理を含みつつもこの認識が素朴過ぎることを指摘せずにはおかない。もし、先述の存在論的構造に符号する筆跡を「実」と判断せよ、と命ぜられれば、私たちは「真」への信奉者と化して、積極的に悪筆をも賛美せねばならないためである。かかる感覚的不条理をまた見過ごさない点に、求道者たる紫式部の眼の確かさがある。往還二相の廻向に道を知れる者の境位があるならば、紫式部の哲学的精神が「まことの筋をこまやかに書き得たる」と精細に書き得たことによって、真理はここに表現せられ、そうして、ここから鑑賞せられる。表現の側に絞って換言すれば、紫式部にとって「こまやかに」書くという姿勢は、「まこと（誠）」が現象的に完成されるべく残されていた唯一の機縁であった

ことを意味する。紫式部の場合には、「話す・書く」といった言語活動が「こまやかに」との間に深い連関を示すことは特筆に値する⁽¹⁹⁾。自己のうちに他者を積極的に引き受けてゆく、以下の一節を頼りとして、愛の表現たるそんな言語的实践に立ち会えよう。

墨、心とどめて押し磨り、筆のさきうち見つつ、こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。

(『源氏物語』③、「野分」、283頁)

犇々とした精神の緊張と集中を強いられる一方で、満ち満ちた情感が他方でこれを融和するかのような一場面である。言語生成の力動性を支える生命線が、書き手の全身体的な共感にあることを紫式部は暗示する。「筆のさきうち見つつ」に働く共感とは、一方では、筆先が紙に触れるときの摩擦を意識しつつ、この物理的抵抗を逆に活かしながら書き進む場に生じ、他方では、視認することによってこれを絶え間なく微調整する場に生じる。「書きつつ読み、読みつつ書く」「話しつつ聞き、聞きつつ話す」ものとして「こまやかに」書く行為は、主客合一たる愛の表現である。愛はその甘美的性質のために伝わりやすい。一呼吸の間に「いとよし」と道徳的善が判断されるのはそのためである。

以上の議論をここに問い直そう。筆跡美と人格美とが相即する仮名の美学的実相「真事」において「真言」が「成る」という状態は、「こまやかに」書く行為なくして成立し得ない真理「まこと(誠)」の道徳的開花の謂である。真と善とを包括しているためにBの筆跡美は「うち見る」感覚的知覚の対象とはならず、「いま一たびり並べて見れば」その価値が把握される理性的判断の対象となる。こまやかな道徳的精神がほのかな感性的美質となって香ってくる。真を尽くして、善を尽くして、美を尽くす、そんな「まこと(誠)」の姿がここに透けている。

註

- (1) 『源氏物語』が書かれた11世紀初頭の遺品には、『稿本北山抄紙背仮名消息』(996 - 1004)、『三宝感応要録紙背仮名消息』(10世紀末 - 11世紀初)、『未詳散らし歌切』(977 - 1023)などがある。特に近年、池田和臣らの科学的研究で書写年代が特定された『未詳散らし歌切』は、高い書芸美をもつ仮名が『高野切』以前に存在した事実を伝える。
- (2) 杉浦妙子「『源氏物語』に見る紫式部の書美について」『書学書道史研究』、書学書道史学会、2007、17号、7頁。
- (3) 本稿での『源氏物語』の引用は「新編日本古典文学全集」(阿部秋生ほか訳、小学館、1994)を使用する。引用部の末尾には(書名・巻数、巻名、頁数)を記す。
- (4) 所謂「散らし書き」の美は、現存する『寸松庵色紙』『継色紙』『升色紙』に明瞭である。
- (5) 「末摘花の文字表記における行為は、作者紫式部の美意識を末摘花に仮借して逆説的に語っていると思われる」(杉浦、前掲書、5頁)。
- (6) 「何事にも現代的であることを紫式部は好んだ」(杉浦、前掲書、4頁)。
- (7) 本稿での『紫式部日記』の引用は「新編日本古典文学全集」(藤岡忠美ほか訳、小学館、1994)を使用する。引用部の末尾には(書名、頁数)を記す。
- (8) 西田幾多郎による「技巧」と「人格」の対比や、『論書』『書品』といった中国書論の「工夫」と「天然」の対比は、「才」と「魂」の対比に通底していよう。後者の対概念は『書断』にも見られ、これが『日本国見在書目録』の舶載状況より紫式部に受容可能だったことから、引用部への影響が示唆されている。橋本貴朗「『源氏物語』絵合巻に見る中国書論の受容(上)・(下)」『若木書法：國學院大學若木書法會誌』、國學院大學文学部若木書法會、2010・2011、10号。
- (9) 「これひとへに女のことをいふのみにあらず […] 女の上にて世間の人の心をしへ奉る物也」。野村精一編『孟津抄上巻 源氏物語古注集成4』、桜楓社、1980、57頁。
- (10) 高村光太郎「書の深淵」『高村幸太郎全集』第5巻、筑摩書房、1995、363頁。
- (11) 西田幾多郎は「運動」の内容を四つに大別する。(a) 物体的運動、(b) 反射運動、(c) 本能的動作、(d) 行為。
- (12) 例えば、ベルクソンも「形」と「運動」との間に美的相関性を見出している。Bergson, Henri, "La vie et l'œuvre de Ravaisson," *La Pensée et le mouvant*, Presses universitaires de France, 1950, p. 230.
- (13) 古代日本人は「かく」に「掻く」「欠く」「描」「画く」「書く」といった漢字を当てる。これらの動詞のうち「書く」の特殊性は「言葉」という目的語を要求することにある。書芸術の成立原理を「言葉を書く」ことに認める研究に関しては、以下を参照。石川九揚『書とはどういう芸術か 筆蝕の美学』、中公新書、2010。

仮名の書の美

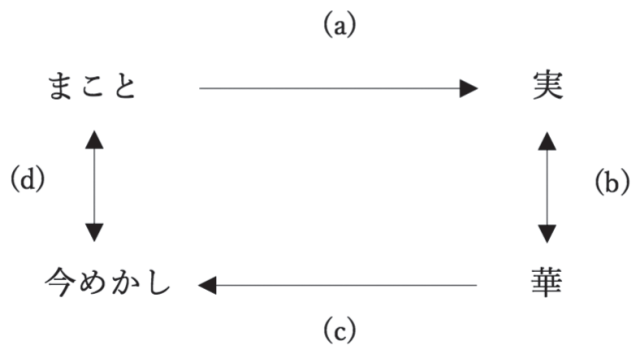
(14) 「こと（言・事）」の一致を以って「誠」とする中国的字義に従えば、先に引用した六条御息所や匂宮の「なまめかしき」筆跡も「誠」と見ると見る必要がある。しかし、この見方では、次の疑問を説明できない。「梅枝」の仮名論評は、源氏が女性たちの筆跡を格付けて印象的である。六条御息所や藤壺の筆跡はこの批評の対象となるが、その筆跡が「なまめかし」で特徴づけられる両者は上手の選に漏れる。

(15) 荒木博之『やまことばの人類学』、朝日新聞社、1995、4-57頁。

(16) 平安時代の用法では、物質的・心理的・非物質的なものも、全て「もの」と言う。

(17) 大野晋編『本居宣長全集』第9巻、筑摩書房、1976、6頁。

(18) この時点で、以下の図式が成立する。(a)「まこと」は「実」である。(b)「実」の対は「華」である。(c)「華」は「今めかし」である。したがって、(d)「今めかし」の対は「まこと」である。前項で「今めかしき」技巧と「まこと」の人格を対置すべきとした所以である。



(19) 『源氏物語』の動詞に限定して分析を試みると、「話す・書く」言語行為を主たる形容対象として、紫式部が「こまやかに」の語を用いる傾向を指摘できる。